

10. 屍体腎移植の 1 例

本多 陸人 (研究生 1 年)

当教室では慢性腎不全末期患者 6 例に対して腎移植術を施行したが, 現在移植後 180 日を経過して生存中の屍体腎移植第 3 例について報告した。患者は 39 歳男子で 5 年来慢性糸球体腎炎で療養中である。当科で本年 2 月より 26 回の血液透析を受けた後 6 月 16 日, 重症脳挫傷で死亡した 30 歳男子の左腎を組織適合性の良好な本症例の右腸骨窩に移植した。Total Ischemic Time は 4 時間, Warm Ischemic Time は 1 時間 30 分である。術後 8 日間の乏尿期に 4 回の血液透析を必要とした。拒否反応抑制剤は Imuran, Predone, ALrG を使用し, rejection crisis と思われるものを特に経験していない。本症例の合併症で重要なことは, 感染症で, 頑固な尿路感染と肺結核症である。前者に対して毎日, 培養と抗菌試験に基づく化学療法を, 後者に対しておもに SM., INAH の併用療法を施行し, 現在軽快しており腎機能も比較的良好である。本症例は本邦における屍体腎移植最長生存例である。

11. 乳児総胆管嚢腫の 1 例

大沼 直躬 (研究生 1 年)

最近教室にて Alonso-Lej の病理解剖学的分類の II 型にはいる稀有な乳児の総胆管嚢腫の 1 治験例を経験したので報告する。

症例 11 カ月。女児。主訴, 腹部膨隆, 黄疸。

既往歴。正常分娩, 生理的黄疸軽度。

現病歴 入院 3 カ月前より熱発, 腹部膨隆に気づく。入院時右季肋部より右下腹部にかけ小児頭大の腫瘤触知。肝スキャンにて肝右葉肝門部の欠損像。腹部レントゲンにて十二指腸窓の拡大あり。以上の所見より総胆管嚢腫と診断し手術施行。Alonso-Lej II 型に属する小児頭大の嚢腫があり, 嚢腫剔出, 胆管空腸吻合術, 胆嚢切除術施行。経過良好である。本症はまれな疾患であるが最近の診断法の進歩および本症知見の普及により報告も多くなっている。文献を渉猟するに 599 例を集めたがそのうち乳児報告例は 76 例であった。この 76 例について統計的考察を加えた。

12. メッケル憩室を先進部とした小腸重積症の 1 例

星野 豊 (研究生 1 年)

症例は 4 カ月の男子で嘔吐を主訴として来院。来院時, 発熱(一), 白血球数 12,600, 臍部の右側にクルミ大, 辺縁明瞭な弾力性軟の腫瘤を触知す。バリウム注腸により

回腸一回腸盲腸重積症であると認む。開腹手術施行せるに回盲部に 5 筒性の腸重積腫瘤を認める。これを整復するに回盲弁より口側 20 cm の回腸に長さ 0.7 cm, およびそれより更に口側 20 cm の回腸に長さ 5 cm の憩室を認む。後者の憩室が内翻し, 重積先進部をなしていた。組織所見では, 両憩室ともに粘膜および粘膜組織に強い出血と軽度の細胞浸潤, 更に粘膜下の浮腫を認む。他組織の迷入なし。術後経過良好で 18 日目に全治退院す。

以上最近, 当教室における本症治験例をメツケル憩室による腫重積症の本邦報告例 41 例に合わせ若干の統計的観察とともに報告した。

13. 低体温麻酔下における前交通動脈瘤 2 例の根治手術中の興味ある経過所見について

平沢 博之 (千大麻酔)

約 29°C の低体温にて, 前交通動脈瘤を 2 例手術した。2 例とも両側前大脳動脈に temporary clip をかけ血流おのおの 17 分, 11 分にわたって遮断したところ, 今まではっきりしていた自発呼吸が突然停止してしまった。そして Clip をはずしたところ, おのおの 20 分, 23 分後に自発呼吸が再開した。これは, 両側前大脳動脈の遮断により, Kaada の示す「呼吸に関係ある大脳皮質」および, 視床下部等の呼吸に関係ある部分が, Ischemia になったためと思われる。常温下では, 3 分間の Ischemia で脳皮質は, irreversible の変化を受けるが, 低体温下のゆえにおのおの, 17 分, 11 分にわたる Ischemia の後も上記の部分は, 機能を回復したものと考えられる。この症例は, 低体温麻酔の有利性および, Vital Sign としての自発呼吸の重要性を示すものとして興味深い。

14. ^{133}Xe による筋血症の測定

小沢 弘有 (千大放射線)

Kety によれば, 細胞膜を越え, 自由に拡散する指示薬は局所の血流測定に利用することができる。この原理を放射性不活性ガス ^{133}Xe を用いて, N.A. Lassen ら ('64) は, 骨格筋, 特に下肢の筋肉に応用し, その筋血流量を測定し, 非常に有効な方法であると報告している。私はこの ^{133}Xe を用い, シンチカメラを使用しておもに乳癌の患者について行なってみた。すなわち ^{133}Xe -neisol 500 μci , 0.2 ml を前腕の筋肉内に注入し, 4 分間静止状態を観察した後, カフにて 200~220 mmHg に圧迫し手首を 60~80 回 2 分間上下運動させて後, カフを解放する。その時反応性充血が起こる。その時得られる血流量を最大血流量というが, 私は主としてこの最

大血流量について観察, 測定を行なった。シンチフォトでは血流状態の概略を知ることができる。特にコリメーターが devide されて使用されたため, 前腕から得られるカーブと上腕とのカーブとの比較に興味あるものが感じられた。

15. 胃癌特異抗原と組織抗原の関連について

吉川 広和 (大学院 3 年)

癌特異抗原の抗原系分析について, 文献的考察を加え, 実験癌による研究の中に, 組織の癌化につれて, その動物の種属特異抗原が, 減弱, あるいは, 消失するという成績に接し, 私は, 「胃癌特異抗原の抗原系分析には, いわゆる, 加賀谷—Eisler の抗原との関連を考慮すべきではあるまいか」という考えのもとに, 2, 3 の実験を試み, 上記の関係を, ある程度裏づける成績を得た。また, 今回の実験は, この主題に関する糸口であり。今後の実験によって, 一層, 明らかにしていく所存である。

また, ほかに, 加賀谷—Eisler の抗原について文献的考察を加え, 併わせ報告した。

16. 腫瘍基質の組織化学的研究

小野田昌一 (大学院 3 年)

癌の悪性度, 殊に浸潤度に応じた基質結合組織の酸性粘液多糖類の変化については 1965 年に林らの報告がある。すなわち浸潤度 INF α および β 例ではその基質結合組織に同物質の著明な出現をみ, INF γ 例ではほとんど認められない。

このたび胃癌手術材料 13 例を用い酸性粘液多糖類が出現する時の基質結合組織の酵素活性を, Adenosine triphosphatase (ATP-ase) Adenosine diphosphatase (ADP-ase) について組織化学的に検索してみた。

胃癌において INF β の場合には正常の粘膜にも存在する ATP-ase のみならず, 正常の粘膜には認められない ANP-ase 活性が証明され, 線維芽細胞の異常な増殖を示しているが, INF γ の場合にはいずれの活性も低下ないし消失していて, 線維芽細胞の変性, 崩壊を示している。このことは悪性腫瘍の基質結合組織における酸性粘液多糖類の変化が, ADP-ase 活性と関連していることを示している。

17. 大動脈炎の病理組織学的研究

曾野 文豊 (大学院 3 年)

高安の発表以来, 高安病, 脈なし病として知られた症例は, 大動脈弓部および弓部より分枝する大血管のみならず, 全身の大動脈に閉塞性動脈炎をきたす全身性の疾

患であることが分ってきた。しかしこれらの症例は病変として, 炎症後の動脈硬化を残遺障害とするもので, 炎症過程および病因の詳細はまだ不明である。本医学部病理学教室剖検例より得た, 臨床経過において長期の慢性副鼻腔炎を有し, 副鼻腔炎と全身症状の緩解, 増悪をともにする, 活動性の肉芽増生動脈炎症例および定型的な脈なし病の 2 例を報告し, 今後の研究方向を報告した。

18. 脳局所循環動態の研究

山浦 晶 (大学院 3 年)

熱電堆と二つの金属プレートを入蔵する体表循環測定素子は, 脳皮質に装着しても良好な測定素子になる。皮質血流の観察に先だち 2~3 の基礎的実験を行なった。加温側プレート下のネコ脳内温度分布よりこの素子は脳表より 2 mm までの局所循環をとらえており, また素子を硬膜上に装着し皮質血流を記録することも可能であり, この際硬膜血管を凝固処置しておく限り, 硬膜切除により皮質に直接装着する場合と差を認めなかった。この方法により生理的条件下で皮質血流を観察するのにきわめて有利となる。一方同一負荷を与えて左右の対称部位の皮質血流を測定し, ほぼ同様の態度を示すことを認め, 一侧の凍結巣と対側正常脳の血流を同時記録し, 病態循環動態の観察をこころみた。エヴァンス・ブルー静注の前処置により損傷部に限局した濃染範囲と血流反応の関係をも観察した。

19. 特発性食道拡張症の成因に関する基礎的研究

—無麻酔・無拘束猫における中枢電気刺激の食道運動におよぼす影響—

三好 弘文 (大学院 3 年)

特発性食道拡張症の成因に関し, その中枢説を裏づけるものとして, 今回わたくしは, 無麻酔無拘束のより生理的な条件のもとに, ネコ脳の刺激実験を行ない, 中枢, 特に視床下部と食道および食道胃接合部との関係について, 若干の知見を得たので報告する。

ネコ 9 例について実験し, まず麻酔下にて銀製アノマ針を双極電極として, 視床下部に植込み, 数日後, 無麻酔無拘束下で刺激実験を行なった。食道運動の記録は, 食道内圧, 筋電図をもってした。

3 例, 電極刺入部位点について電気刺激した。刺激と同時に, 中部食道, 下部食道, 接合部に, 同期性の陰性波と Burst の出現したものを反応陽性とした。5 点のうち, 陽性例は 1 点で, その電極刺入部位は実験後, 脳連続切片の作製により, 左 Hvm に確認された。

以上の実験より, 中枢特に視床下部と食道運動は何ら